

〈近代本論第十三回：人口論と進化論（ダーウィン）〉

参考文献

- ※チャールズ・ダーウィン『ビーグル号航海記』島地威雄訳、岩波文庫、1959（原書初版は1838～43年）
- ※チャールズ・ダーウィン『種の起源』八杉龍一訳、岩波文庫、1990（原書初版は1859年）
- ※ピーター・J・ボウラー『進化思想の歴史』鈴木善次他訳、朝日選書、1987（原書初版は1984年）

十九世紀は、ヨーロッパにおける産業革命の普及が、植民地主義、帝国主義と合体していく過程である。主導したのはもちろん軍産革命に邁進した〈欧米列強〉であり、近代化の後発国は、植民地化の圧迫を受けながら、欧米モデルの近代化の流れに乗ろうと必死にもがいた。日本はその一つだが、日本だけでなく、たとえば中南米では、その圧力ともがきが、もっと早く十九世紀初頭には本格化している。

この過程は、〈文明化〉というイデオロギーによって推進された。その場合の〈文明〉も欧米の文明であり、植民地化はしばしばこのイデオロギーによって免罪符を与えられていた。その背景にはもちろん、キリスト教化と人種論が見え隠れしている。

この〈文明化〉イデオロギーに、マクロの時空パラダイムを与えたものが、〈世界史〉と〈進化論〉だった。前半がヘーゲルの〈世界史〉モデルによる、〈必然の文明化、西洋化〉の時代、後半が、〈進化論〉の時代で、それは登場してすぐ、〈社会進化論〉へと〈自己進化〉していった。しかしこのことは、〈進化論〉が当初純粹に学理として、生物学として登場したことを意味しない。〈進化論〉の実体は、これから見るように、むしろ潜勢態にあった社会進化論を生物地理学に応用したものである。鍵となったのはマルサスの『人口論』とコントの社会進化モデルだった。前者はダーウィン、ウォレスの出発点となり、後者はスペンサーに流れ込む。

開港のパラダイムとして見れば、〈軍艦外交〉を幕末の日本を舞台に繰り広げた列強は、世界史、進化論のいずれに対しても、〈最先端のわれわれ〉という自覚を強く（強すぎるほど）持っていたことが確認できる。その場合、世界史、進化論いずれも弱肉強食的、あるいは〈悲劇〉的に観念されていたから、彼らの意識はまず日本の位置づけに向かう。未開から文明のいずれの段階に日本があるのか、その「事実」認識が合理的折衝の基盤にお

かれた。しかしその「事実」はパラダイムにおける「事実」であるから、そのパラダイムに包含されていない集団、たとえば日本には見えない仕組みになっている。そこから事実認識（現実の）においてさまざまな齟齬、ほとんど悲喜劇的なズレの連続が生まれていくのだが、その具体相は次章で検討することにしてここでは省く。

ここでもう一つだけ確認しておきたいのは、このパラダイムに内在する「競争」のモメントが、列強相互間でも当初から強く意識されていたことである。つまり弱肉強食とはつねにそういうことなのだが、「誰が頂点に立つか」をめぐる様々な確執、陰謀、外交の表技と裏技が繰り広げられることになる。それらすべては幕末維新の外交史を複雑に紡いでいくことになるのだが、その際、事実関係のみに着目すると必ず「八幡の藪知らず」になる仕組みになっている。あるいは異常に複雑で陰謀好きな異人が突然押し寄せたようなそういう観念を持った人々も実際にいた（この人々の多くは後に国体論者に化け変わったことも付言しておこう）。非常に冷静な観察者だった勝や福沢のレベルでも、是々非々で対処するしかなかったというのが実際に、背景にあるパラダイムの実体は、ようやく明治になって徐々に認識されていくことになる。したがってその齟齬は齟齬として、背景のパラダイムをまずこうして明らかにしておけば、維新革命をトータルに評価することにも通じると考える。それがいま、こうしてやや複雑なイデオロギー過程に立ち止まっている真の動機だと理解されたい。

〈世界史〉パラダイムはともかく、文明化、植民地化、宣教活動、人種主義（奴隷制を含めて）の積極的承認を〈含意〉していた。その出発点は、もちろんヘーゲルの歴史哲学である。もう一度、簡単に確認しておこう。

〈自由の意義の区分について、一般的に述べるとこうなる。東洋人は一人の者だけが自由であることを知っていた。これに対して、ギリシア人とローマ人は、少数の者が自由であることを知っていたにすぎない。これに対してわれわれは（現代ヨーロッパ人は）、すべての人間が本来自由であること、すなわち人間が人間として自由であることを知っている。そのことはまた、世界史の区分と、世界史をいかに取り扱うべきかという方法とも関連している。〉（ヘーゲル『歴史哲学』〈序論〉78p）

すべての人間が自由である、とヘーゲルがあらためて認めてくれたのはすばらしいことにはちがいないが、問題は〈区分〉と〈とりあつかい〉にあった。つまり、〈世界史〉は順々に〈世界精神〉が自己実現していくものだから、飛び越えはできない。したがって東洋はいまだに東洋であり、奴隷はいまだに奴隷である。なぜなら、

〈奴隷制度も、国家の中の制度として存在する場合には（※封建制の農奴たちと違い、という意味）、たんに個別的な、感性的な存在から進歩するための一つの契機であり、教育の一環であり（！）、換言すれば、高次の人倫と、この人倫に結びつく文化に参加するための、一つの手段である。人間の本質が自由にある以上、奴隷制はそれ自身としては不正である。だが人間は、だんだんに自由に成熟していくのでなければならない。それゆえ

に、漸進的に奴隷制を廃止していくほうが、急激な廃絶よりもかえって妥当であり、より正しいように思える。) (同上、上、210p)

一言言っておけば、ここに見られる奴隷商人のまなざしは、ヘーゲル個人が特に偏見に満ちていたからではない。十九世紀の前半は、ヨーロッパが列強となっていく、そういう時代であり、それは優勝劣敗に酔い始めた、マッスとしてのかれらのまなざしでもあった。しかしもちろん、その強烈な人種論、ヨーロッパ至上主義に、〈世界史〉の枠を与えたのはヘーゲル自身である。

〈世界史〉はもちろん歴史時間のパラダイムだが、〈進化論〉は最初、生物地理学から出発した。つまり空間における、生物種の分布のある種の趨勢が、〈種の進化〉の結果ではないかという直感を与えたのである。種史を再構成しようとする前に、空間的な分布の偏りが問題となった。これは少し逆説的に響くが、科学史上の事実である。

〈進化論〉は、ダーウィンとウォレスによって、ほぼ同時に理論化されたが、二人とも、生物学は博物学として研究していた。種間、亜種間の形態の差異を微細に比較研究していく立場である。したがって広い地域で〈採集〉と観察を続けることが必要だった。これも二人に共通している。

空間的分布として、ある種を調べてみると、同族の種、亜種に、伝播と拡散だけでは説明できない偏りがあることがある。それは大絶滅の結果かもしれない。しかし、大絶滅を証明するような地史上の変動が観察されていない地域にも、おなじ質の偏りがある。これは種が固定されていたとすると、説明できない。では……と推論が続き、ついに種そのものの変容＝進化が発見されることになる。したがって、最初は形態の分布を極大の空間でモデル化し、その似ているところ、似ていないところをマップに記録するのが彼らの仕事の実際だった。〈進化〉という時軸は、さいごのさいごに、〈理論モデル〉として導入されるのである。このことをまず確認しておこう。そしてその〈理論モデル〉の導入に、最大の力があつたのは、生物学ではなかった。人口論である。マルサスのあの『人口論』が鍵となつたのだ。これもダーウィンとウォレスに共通している。こうしてまず、生物進化論というモデルの構築が、意外なところで人間の社会と重なり合うという直感を持つことが非常に重要である(進化論が文明論と融合していく過程を理解するために)。

チャールズ・ダーウィン(一八〇九～一八八二)の〈フィールド調査〉は、もちろん軍艦ビーグル号での五年におよぶ世界周遊だった(1831～36)。進化論との関連では、ガラパゴス諸島での調査が有名だが、それは全体の十分の一にも満たない。ガラパゴスでは、いわゆる〈島嶼化〉による生物多様性の現実に触れていたはずだが、彼の関心の中心はやはり新種の発見と記述に傾いていたことがわかる。そして問題設定の基軸は、やはりあの種と亜種の拡散の偏りだった。したがって、ガラパゴス諸島での体験から進化論が生まれたというのは、どうやら〈神話〉らしい。ダーウィン自身は、その問題をこう設定している。

〈たしかに、この世界の長い歴史の中で、広範な、また幾度となく繰り返された生物の滅亡ほど、人の心を驚かす事実はない。……

食糧の供給は、平均してみると一定の量にとどまっている。しかしすべての動物の繁殖と増加の傾向は等比級数的である。(ダーウィン『ビーグル号航海記』1834年1月9日、上、263p)

ダーウィンはここで、地史的な変化の要因をまず考え、それは絶滅の原因ではないと考える。この地域は大きな気象変動等がないにもかかわらず、大絶滅が何度も起きているからである。したがって絶滅は内在的要因、つまり稀少な生命資源をめぐる〈生存競争〉によるものである、という風に推論は進行している。

具体的な証拠、あるいは現象は、〈絶滅〉である。そしてそれだけであることに注意しよう。それをマルサスと結びつける、すると〈競争〉、〈生存競争〉のイメージが浮かぶ。なるほど、適者だけが生き残り、敗者は絶滅したのかと納得する。

同じモデルは、より整った形で、『種の起源』の冒頭に呈示されている。すべての生物において、繁殖は幾何級数(等比級数)的である。したがって〈生存競争〉が生じる。

〈これはマルサスの原理を、全動植物界に適用したものである。どの種でも、生存できるよりずっと多くの個体が生まれ、したがって頻繁に生存競争が起こるので、なんらかの点でたとえわずかでも有利な変異をする生物は、複雑でときおり変化する生活条件のもとでの生存の機会にめぐまれ、そのようにして、自然に選択される。遺伝の確固たる原理にもとづき、選択された変種は、どれもその新しい変化した形態をふやしていくことになる。〉(ダーウィン『種の起源』〈序言〉、上16p)

マルサスの『人口論』(1798年)は、もちろん統計経済学的手法で提出されたモデルで、それ自体、生物学への応用を予定したものではない。それは産業革命による人口の増加を、食糧の不足、生存競争の激化、そして貧困の発生との必然性へと結びつけたモデルだった。マルサス自身は啓蒙家を自覚していたらしいが、98年はもちろんフランス革命からナポレオン帝政への移行期であり、貧困層の発生は、彼にとっては(イギリスの為政者にとっても)モブの発生、革命の再開へと連結されていたことは確実である。つまりそれは〈社会進化論〉の先駆型であり、優生学もすでに介在している(貧困層の産児制限という、まことに不吉な形で)。マルサスが苦労したあげく得た定職が、東インド会社関係の育成校の教授というのも、すでにスペンサーの時代を彷彿とさせる連結ではあった。

いまいちどダーウィン進化論誕生の現場にもどると、空間的布置の博物学、生物地理学に、進化の時軸を与えたのは、〈生存競争による絶滅(と存続)〉という推論だけだった。眼前にあるのは、現存生物種の分布の偏りである。それだけが科学的事実である。そしてあとは〈推論〉だった。自然選択は、それ自体が観察されたのではなく、推論として外挿されたのである。

この外挿はしかし絶大な威力、説得力を発揮した。科学によって裏付けられた生存競争の現実、と読み替えると、その意味はすぐわかると思う。つまり.....真実に起きていたのは、トートロジーにすぎなかった。マルサスによって〈啓発〉された生物学のモデルが、マルサスの見た〈生存競争の現実〉を〈科学的に裏付けた〉のである。

その〈生存競争〉のもっとも酷薄な姿は、文明対非・文明において、露呈していた。ダーウィン自身、インディオに対するホロコーストを記録している。アルゼンチンではインディオに対する〈戦争〉が行われていた。しかしその実態は、文明の名のもとに行われたホロコーストである。

〈インディオたちは、老若男女をあわせて110人ほどだったが、ほとんど全部が捕らえられたり殺されたりした。……二十歳を越えたと思われる女性は、無惨にもことごとく虐殺された。わたしはそれを非人道的だと抗議したのだが、兵卒は、「でもやむをえませぬ。どんどん産みますからね」と答えただけだった。

この土地では、すべての人が、その戦争は野蛮人に対するものだからという理由で、正義そのものだ と確信している。〉(ダーウィン『ビーグル号航海記』〈バイア、ブランカ〉上159p)

しかしダーウィンその人も、〈文明対野蛮〉のスカラの上で未開を見ていたことは、同書のプロト・人類学的な観察の基調となっている。たとえばフェゴ島の未開人の〈野蛮さ〉に驚いた彼は、こう述べている。

〈野蛮人と文明人の隔たりがこれほど大きなものだと信じられない思いだった。人間にはそもそも改善の能力がある。だからこの差は、野生動物と家畜の間の差よりも大きいことになる。〉(同上、1832年12月17日、中48p)

野生動物と家畜の差は、彼にとってはホームグラウンドだった。飼育栽培での変異の浮動と多様性が、〈種の進化〉の直感を与えたからである(『種の起源』第一章〈飼育栽培のもとでの変異〉)。したがってここでは、フェゴ島の未開人と、ビーグル号の〈文明人〉のあいだに、すでに亜種以上の〈変異〉が認められていることになる。文明と未開は、生物学的に隔離されたのである。つまり未開における〈改善〉の余地なしと判断されたのだった。

形態学と地理学の結びつきは、アレクサンダー・フォン・フンボルト(1769~1859)によって始められた。これもダーウィンとウォレスに共通していることだが、二人ともフンボルトを強く意識している。特にダーウィンはビーグル号探査の前半は南アメリカ(ガラパゴス諸島もその一部)に専念したから、その領域での先駆者であり、ヨーロッパ中に名声が響いていたこの総合的自然学者を強く意識したにちがいない。

しかしフンボルトの博物学にあって、二人に根本的に欠如したものがあつた。それは自然の〈コスモス〉に対する関心、というよりセンスである。それはつまり、〈生態系〉に対するセンスだったと言い換えることもできるだろう。それはたとえばゲーテやヘルダーリンの自然観の基礎でもあり、広くドイツ古典期そしてロマン派前期まで共有された基本感覚だった。これがどうしてかこの進化論の提唱者たちにはまったく欠如していた。森を見て森を見ずではないが、彼らが見ていたのは森の中で「生存競争をしているはずの」各種、それだけだった。これはある意味象徴的ではないかと思う。それはつまりマルサスの

『人口論』のどこにも、〈自由、平等、博愛〉の影すらさしていないのと並行しているように思える。個別の種を全体環境と結合するモデルは、つねに〈生存競争〉と〈種の保全〉だけだった。生物環境の持つ全体性と調整機構は、すべてこの〈人口過剰の自己調節〉へと単純化され、還元されたのである。

もう一つの基本要因として、モデルの偏りが観察される。つまりダーウィンとウォレスは、生物の観察から進化論を発見したのではない。〈種〉の観察からである。生物学の次元では、二人とも素朴なレベルの博物学者、収集採集家であって、新種の記述がその学問的な野心だった。そしてその〈種〉は、つねに生存の危機におびえ、盲目的に繁殖し、たがいに生存競争を仕掛け合う、そういう存在だった。それはつまり、『人口論』の描く、食糧資源を使い尽くす階級社会そのものである。生物学、特に進化論において、〈種〉ではなく〈個体〉に注目し、現実の生命活動を記録し分析することは、今西グループの登場を待たねばならなかった（これはこのグループの最大の功績、貢献である）。

この個体の飛び越えは、〈種〉間の闘争を生命現象の本質であるとする見方を可能にした。これはパラレルの現象がある。ヘーゲルの世界史においても、個人ではなく、民族でもなく、最終的な〈理性の現実態〉とされたのは、国家であり、国家のみだった。そしてこの国家こそ、〈生存をかけてあいあらしう主体〉なのである。そしてその国家は宗教と一体化して、〈人倫の国〉となる（『歴史哲学』）。ホップズはまだ比喩として、〈リヴァイアサン〉の主権単一性を説いていた。それがヘーゲルにおいては、実体的に〈完全な主体〉となる。それは〈精神〉と同義だからである。

〈完成された国家は、共同体としてのまとまりを持ち、自由を実現している。自由を実現することこそ、理性の絶対的な目的である。国家はこの世界に現存し、この世界に実現され、意識にもたらされた精神そのものである。〉（ヘーゲル『法哲学』第三部〈共同体の倫理〉500p）

そして自由であり、主体であり、精神である国家は、一つの自然権を持つ。生存権である。ここから戦争の権利が生じる。

〈国家は守られねばならないが、それは国家の目的が市民の生命、財産の保護にあるからではない。そういう目的しかないのなら、国家を守るために生命を危険にさらすのは、矛盾であり、本末転倒ということになるだろう。〉

そうではなく、共同体にとっては、個々の成員という要素を否定した、国家の理念的統一が絶対的に必要なのである。それは目に見えるすがたをとらないといけない。したがって戦争は、外から偶然やってくるものではなく、国家の必然的な要素である。国家の独立を守ることに、そこに理念的統一の本質がある。（同上、589p）

戦争を「国家の必然的な要素」と見るのは、ヘーゲルが初めてではない。絶対主義が錯綜した領土戦争を常態化した時、その戦争を合法のものとして非合法のものとして弁別することから、近代国際法そのものが始まっている（グローティウスの戦争法論）。その場合、合法

化された戦争は、〈自然法〉によって基礎付けられた（これもグローティウスから始まる）。その〈自然〉を〈必然〉と理解すれば、ヘーゲルの主張になる。さらに国家を〈種〉と読み替え、〈成員〉を〈生命個体〉と読み替えれば、ダーウィン＝ウォレス的な〈生存競争〉が即座にモデル化されることに気がつく。〈種〉の存続にのみ注意がいくと、生命社会は結局、〈種の優勝劣敗〉社会に変容してしまう。ちょうどヘーゲルの世界史が、国家、民族、人種の〈存続をかけた〉闘争史に早変わりしてしまったように。

そうした〈世界史〉は、一民族、一つの国家、一つの人種の勝利へと収斂せざるをえない。したがっていつも現実の多様性、多型性は、〈克服すべき低次の状態〉だとされてしまう。それは現実の世界における、集団と個の多型性、多様性を説明できない。説明しようとしないのである。

それと同じく、〈種〉の優勝劣敗にこだわる進化論は、けっきょく現実の生命社会の多型性、多様性を説明しきれない。説明しようとしなさい。ここからして、ダーウィンが呈示する系統樹の根本的な自己矛盾が露呈する。現実の生命進化は〈種〉の一種への収斂ではなく、まったく逆側の多様性、多型性への拡散をつねに示す。淘汰論はこのことをまったく説明できないのである。それはもちろん、〈生存競争〉モデルが、個体の競争をそのまま〈種〉に拡大してしまったからだった。種の変異が個体間の競争の結果ではないかとダーウィンは直感しているのだが、けっきょく〈人口論〉の圧に呑み込まれてしまうのである。

生物学において、この矛盾を自覚し、はっきりと反・ダーウィニズムを標榜したモデルの登場は、二十世紀の前半までまたねばならなかった。その代表者の一人、ヤコブ・フォン・ユクスキュルは、定向的多型化を生物多様化の基本的事実として強調する。さらにもどのような初期的な〈種〉も、環境が許せば、ずっと存続し続けていると指摘し、この普遍的事実こそが、生物の現実態である以上、それは直截にダーウィニズムを否定していると主張する。

〈「進化」、または発展は、系統樹的な分岐が減少していくということを指示している。しかし進化論者は、逆に「進化」という言葉を使いながら、生物の世界で実際に観察される多様性の増大、つまり、まったく単純な体制のアメーバから出発して、哺乳類にまでいたる、定向的に増大するその生物多様性そのものを指し示そうとする。しかしここで実際に起きているのは、〈進化〉、つまり少数種への収斂ではなく、その逆の〈複雑化〉であり、それが事柄の本質である。〉（ユクスキュル『理論生物学』）

生物社会の現実とは、つまり未開も、部族社会も、国家も、国連も、すべて包含しているようなものである。それはまたちょうど、元素の〈進化〉において、複雑な有機体も、もっとも単純な水素、ヘリウムも、仲良く並存しているようなものである。この並存を否定する時、生態系的な共進化はすべて否定される。それが〈人口論〉モデルの特性でもあった。貧困の根絶のために、貧困者の出産制限を提案したのは他ならぬマルサスであり、それはすでに立派な（立派におぞましい）優生学であった。

ダーウィンとウォレスがいなければ、進化論は生まれなかったのだろうか。

淘汰なしの進化モデルの呈示は、それほどに難しいものだったのだろうか。

これはしかしやはり、先行するパラダイムの力に巻き込まれたからではないかと思う。

フンボルトの〈コスモス〉は、はっきりと二十世紀の環境学、生態学を先取りするものだった。生命環境の全体性から出発し、その調和的展開を探ろうとする視座で一貫していたからである。そして個々のデータ、種のデータも指数関数的に蓄積されていた。そこにはたしかに、〈世界貿易〉と、〈帝国〉の力も働きはじめていた。ダーウィンは軍艦に乗っていたし、ウォレスが専門としたマレー諸島も、すでにイギリスの支配下にあったからこそ、広範な採集活動を行えたのである。しかし、何度も指摘する通り、彼らには〈調和的全体〉のモデルが欠如していた。コスモスも、環境も、生態系も知らないままに、個別の〈種〉とその〈種〉の存続だけに注意を集中した。それは、ヘーゲルが国際法を放擲して、個別の〈国家〉が織りなす戦争絵巻に耽溺していたのと等質の、全体性喪失であった。

進化論は、ダーウィン、ウォレスに頼らずとも、いずれ生まれたのではないかと思う。進化論が生物の主体的自己展開の原理である以上、生物学、遺伝学は、ダーウィン、ウォレスが観察した、〈種の分布の偏り〉の謎をいずれ解かざるをえなかったからである。そしてそれが〈人口論〉と結合する必然性は皆無であった。もしこの結合が生じないか、ずっと弱ければ、フンボルトとユクスキュル、そして今西錦司や木村資生をつなぐ線上に、〈生物社会の進化〉のパラダイムは、ほぼ自然発生していたと考えたい。データの定向的な蓄積と、十九世紀後半に起きた（ドイツを中心に）動物学、生物学の進展は、その方向を強く示唆しているからである。

〈人口論〉は、ともかく、生物学ではなかった。経済学のところもをまとった、文明化、階級化のイデオロギーにすぎない。それはともかく生命原理ではない。だからこそ、生命を擬人化して見る、そういうモデルの基体となつたのではないかと思う。〈人口論〉がダーウィンの世代の聖書となつたころ、もう一つのパラダイム、〈文明の進化〉が登場する。舞台は社会学という、新しく提唱された学問領域だった。その社会学の祖型は、産業革命の自画自賛でもあった。他ならぬ、オーギュスト・コント（1798～1857）の〈実証主義的社会学〉である。

コントは、社会と生物のアナロジーではなく、学問と社会のアナロジーを示した。学問がまず神学にきわまる（中世）、次にそれが形而上学へと変容する（啓蒙期からカント）、そしてそれは科学という究極の形式を取る。これが学問進化の頂点である。それに対する社会は、まず軍事的な相克する封建諸侯としてあらわれる（中世）、それが法治国家へと至る（近代）、そしていまは産業の全盛期である（現代）。法治で社会は完成されたのではない、ブルジョワの〈自由放任〉が真の〈歴史の終わり〉である。

これもまた不吉な響きのする単純化だった。カントの崇高にして厳格な法理念を白紙にしたところから、ヘーゲルの〈世界理性〉が始まったように、十九世紀の産業が、いかに法治を極権と感じるようになったか、〈ルールなしの、科学を活用した増殖〉を望んでいたかが、この楽天的モデルに如実に表れているからである。それはもちろん、最新の応用科学である軍産と結びついた植民地における増殖だった。そこでは〈もうけ〉が一番大きく、そして法治はないに等しかったからである。遅れて社会ダーウィニズムが、それに免

罪符を与えると、生物学そのものが、たとえば大脳の比較において、人種の優劣を決めようと励むようになった。

こうしてみると、〈生物主義〉と総称された〈社会的ダーウィニズム〉の害毒は、もともと〈生物〉モデルを人間社会に擬するから問題があるのではなく、その〈生物〉モデルそのものが、十九世紀の文明、その酷薄な生存競争のパラノイアに毒されていたのではないかという、逆側からの問いかけが可能になると思う。

ちょうど、ヘーゲルの自由が、逆側から見れば、隷従への恫喝と同義であったように。したがってここでも、その〈自由〉概念そのものに問題があったということになるはずである。隷従と自由はけっして弁証法的な関係にはなかった。〈自由〉の偏狭な自尊パラノイアに、すべての病理性が潜んでいたのである。〈自由〉の局外者から見れば、つまり奴隷にされかけ、三等民族扱いされかけた、非・ヨーロッパ人からすれば、十九世紀とは、単純に、赤裸々に、酷薄で、低劣で、皮肉な世紀だった。皮肉というのは、その酷薄から脱出しようとするれば、(さしあたり)ヨーロッパ的〈自由〉を追求し、模倣するしかなかったからである。

単純化が必要であると思う。

〈世界史〉も〈社会進化論〉も、それ自体、スコラ哲学のように繁茂し、迷宮化していくが、〈内部〉と〈外部〉の差異は、単純に一貫していた。それはヨーロッパ内部と外部であり、その本体はあっけないほどに単純な、人種優越論、白人至上主義である(ウォレスは後年、黄色人種の消滅の必然性を説いた)。それに〈優越する文明〉の実体を与えたのは、産業革命、都市革命、そして軍事革命だった。その根拠は、前半は〈自由を実現していく世界史〉であり、後半は〈進化の科学〉だった。『種の起源』が出版された1859年がだいたい区切りとなる。哲学的、歴史的に優越していたと、集団のエゴの履歴に耽溺したヨーロッパの選良たちは、その優越を「科学的に証明された」事実として受けとめる。こうして植民地主義はその生物主義、科学主義によって、いっそう猖獗をきわめることとなった。

木戸や大久保や西郷が直面した西欧とは、まさにそのように歴史と科学と軍艦でゴリ押ししてくる、〈列強の文明〉であった。そこからわれわれの近代の模索もはじまった。そのことをあらためて意識する必要があるのではないかと思う。なぜなら、だいたいネオコンの登場、あのハンティントンの〈文明の衝突〉モデル(とフクヤマの〈歴史の終わり〉云々)あたりから、先祖返りのような、かびくさい〈文明〉や、疑似科学(似非科学)の復活、あるいは復活の試みが隠然と続いているように感じるからである。たとえば現在のアメリカで、〈われわれの文明〉というジャルゴンが、どういう集団によって使われているかチェックしてみるとよい。たいていはMAGA、あるいはもっとひどい白人至上主義の集団である。それはヘイトクライムと直結するという意味において、十九世紀的人種イデオロギーの末裔である。したがって、こうした毒草のルーツそのものを、パラダイムそのものを、あらためて顕在化させ、文明的観点からではなく、文明病理学的観点から、根絶する必要があると思う。

もう一つ例をあげておこう。優生学という、悪性の腫瘍のようなイデオロギーがある(学問ではない)。ナチズムが強制収容所で使った論理だと言え、思い出して顔をしかめる

のが普通の反応だと思う。しかし当時、優生学はトップの〈科学〉だった。それは〈進化論〉によって〈根拠づけられた〉というのが一般の理解だったからである。その優生学が、あろうことか今度のコロナ禍で復活した。

スウェーデンは最も激しい感染が起きた初期、マスクの着用も義務付けず、〈社会的距離〉の確保もせず、飲食店も開け放しだった。おどろいた外国のメディアが医師会の責任者に質問すると、それは〈集団免疫〉の獲得のためで、〈早ければ早いほどいい〉。多少は被害が出る、それは仕方ない、でも社会全体のために結局はなる。だからそういう放任をしたのだという。そしてそれは〈科学的根拠のあることだ〉と付け加えた。わたしもそのインタビューを実見したのだが、開いた口がふさがらなかった。その〈弱者切り捨て〉の論理は、まったくの優生学だったからである。おなじ発想は、あの物議をかもしたボリス・ジョンソン首相の放任宣言の時にも見られた。オフレコで話されていた、〈社会的コストと死者数の天秤〉は、これも優生学の論理である。

優生学は、〈すぐれた遺伝子を残し、劣った遺伝子を駆除する〉という、おそろしくも赤裸々な論理で、前提は生物進化論と社会進化論の融合から生じた、〈優秀な人種の育成〉のイデオロギーである。ダーウィンが〈自然選択〉(natural selection)と、まだニュートラルに設定した進化の中心概念を、社会ダーウィニズムの運動を起こしたハーバート・スペンサーが〈適者生存〉(survival of the fittest)と勝手に言い換えた時、社会進化する集団は、優勝劣敗の集団へと置き換えられ、その中にはすでに優生学の萌芽も含まれていたのである。

十九世紀は、人文性の闇の時代だった。人口圧の恐怖、進化論的淘汰、そして産業と軍事による文明化というパラノイアが、先進文明そのものを闇に導いた。そうわれわれの遠近法は告げている。人類史、地球史、宇宙史のアンクルである。それはすでに実体化したわれわれの定位の理念的時空である。そこを浮遊、浮動するわれわれのこころの自由からして、人口論、進化論、文明化という闇の時代を病理学的に剔抉しなければならない。

なぜなら、病理的な〈隷従を強制する(してよい)自由〉と〈先進文明〉のパラノイアは、いつでもまた復活しうるもののようなから。コロナ禍が教えてくれたことの一つである。

手遅れにならないうちに、われわれのこころの本拠を固めること。最広義の人文精神をいまいちど力強く喚起すること、これ以外に、〈闇の力〉に抗する手だてはない。わたしはこころの底からそう思う。

以上の「現在の」アンクルから、再び開港のパラダイム、その革命と世界史と進化論の内的連鎖を概観する時、勝や福沢たちが置かれていた〈文明環境〉が如実に見えてくると思う。それは自他の峻別を行う、〈他者のパラダイム〉だった。これが一つ。そしてこちらがわ、日本側は、つねにその〈文明〉によってどの程度までの操作、折衝が可能か計られ続ける、そういう〈対象〉であったということ。このことを、彼らは肌身をもって日々感じていた。一方でまた〈文明〉は、〈万国公法〉を標榜し、国際貿易の互惠性を強調した。その場合、〈開化〉をうまくやり遂げさえすれば、日本も〈文明国〉として認められるのではないかという淡い期待も生まれた。この期待が幻想でしかなかったことは、不平等条約と治外法権の苛酷な現実が教えることになる。鹿鳴館で最後の〈歩み寄り〉を行っ

たあと、明治国家は基本的に自立の道を辿ることになる。立憲と議会制がその選択の最初の大きな成果だった。

しかし事態はすでに十分に複雑化していた。人種論的な文明論が、結局はマクロの家産国家幻想、分捕り放題の植民地帝国主義に帰結したように、こちらがわの固有文化論も、国体論を生み、やがてそこから〈独自の〉帝国主義が展開していったからである。したがってここでは、非常にネガティブな意味での「文明化の弁証法」を認めるべきかもしれない。軍艦外交と文明化圧力を経験した日本は、〈余力が生じるや〉、同じ軍艦外交と文明化圧力を周辺のアジア諸国に向けるようになる。しかしそこにはまた、苦い過去の思い出を活かそうとする、〈アジア同胞の列強からの解放〉という大アジア主義的なイデオロギーも芽生え始めていた。その複雑な過程の全体が、日本近代に影のようにつきまどっていく。

しかしその起こりは、あくまで黒船がもたらした開港パラダイムと、それに対する志士たちの応答であったことが確認できる。したがってまずその根源を、冷静に、客観的に確定しておく必要があると思う。それが次章の課題である。

(近代本論第十三回テキスト終わり)